

# 明治前期における岡山区 住民構成の再編

神 立 春 樹

## 目 次

- 1 本稿の課題
- 2 明治初期の人口構成
- 3 明治当初における産業構成・職業構成
- 4 明治10年代の産業状況
- 5 明治10年代の困窮状況
- 6 都市下層民としての再編

## 1 本稿の課題

本稿は、明治10年代（1877～1886年）末までの明治前期の岡山市域における住民の職業的な構成の変化を検討し、これを通じて、日本資本主義の本源の蓄積期、ことにその最盛期である松方デフレ期を含むこの時期における旧岡山城下町の旧武家・町方の近代の都市構成員への編成替え＝社会的再編成を究明することを意図するものである。この旧城下町の武家・町方の都市住民としての編成替えの過程の究明は、その後の都市住民構成の推移の始点の状況を明らかにすることであり、本稿は都市住民構成史の一端に位置するものである。

## 2 明治初期の人口構成

岡山城下町の、これは1878（明治11）年の郡区町村編制法施行後は岡山区であり、1889（明治22）年の市町村制施行後は岡山市である地域の明治初期の戸口については、1871（明治4）年9362戸、3万3653人、1872年9071戸、3万2080人、1879年8961戸、3万2383人、1884年8393戸、3万3663人、1886年3万3509人、1888年市制施行以前9008戸、3万3801人、と記されている<sup>(1)</sup>。その出所の不明のものもあり、統一的ではないが、人口3万2、3千人台であったとみてよい。第1表は、明治10年代（1877年～）について同一資料にもとづく戸口推移を示すものである。現住人口は1881年の3万4989人から少しずつ減少し、1884年には3万3751人と1000人以上の減少となっているが、1885年には3万4千人台に回復し、しかし翌年には3万2千人台と、この時期の最少となる。このようなジクザグは出寄留と入寄留の動きの交錯の結果である。出寄留、入寄留はともに、1884、85年に増大しているが、これは松方デフレの最も深刻な時期における、それゆえの流出、流入を示すものといえよう。

この第1表には、族籍別人口があるが、1883（明治16）年で士族は31%、平民68.5%で、3割が士族である。1871（明治4）年の廃藩置県のとときの構成は、士族1万0920（男5472、女5448）人、平民2万2732（男1万1161、女1万1571）人、華族1<sup>(2)</sup>で、士族は32.4%である。この間に1004人の減少があり、このことに大きくよって士族のウェイトは若干低下しているのであるが、住民の3分の1が、士族であったとみてよいであろう。このように多数の士族がおり、これが秩禄処分で公債証書を付与されて、無職となっているのである。3分の2を占める町方＝平民とともに、これら岡山城下町の住民の社会的再編成の実態究明が課題となる。

(1) 『岡山市史 第六』 1938年 岡山市役所 3962～3963ページ。

(2) (1) と同一書 3961ページ。

第1表 岡山区戸口——1881(明治14)～1886(明治19)年——

		1881年 (明治14)	1882年 (明治15)	1883年 (明治16)	1884年 (明治17)	1885年 (明治18)	1886年 (明治19)	
戸数		7,237	7,093	7,093	7,290	7,395	8,335	
現住人口	男	17,939	17,310	17,310	16,875	17,131	16,539	
	女	17,050	17,014	17,014	16,696	16,929	16,298	
	計	34,939	34,324	34,324	33,751	34,060	32,835	
本籍人口	男	16,352	16,159	16,159	16,026	16,326	16,753	
	女	15,565	15,819	15,819	15,763	15,950	16,350	
	計	31,917	31,978	31,978	31,789	32,286	33,013	
出寄届	男	776	577	577	1,497	1,423	1,250	
	女	562	334	334	1,052	1,118	624	
	計	1,338	911	911	2,549	2,941	1,874	
入寄届	男	2,363	1,728	1,728	2,346	2,389	3,767	
	女	2,047	1,529	1,529	1,985	2,133	1,868	
	計	4,410	3,257	3,257	4,331	4,521	5,635	
本籍人口 族籍	士	戸主 計	男		2,468	2,374	2,369	2,527
			女		132	128	140	286
			計		2,600	2,502	2,509	2,813
	族	家族 計	男		2,580	2,387	2,418	2,253
			女		4,736	4,640	4,566	4,539
			計		7,316	7,027	6,984	6,792
	平	戸主 計	男		5,209	5,535	5,598	6,387
			女		908	862	844	1,453
計				6,117	6,397	6,442	7,840	
民	家族 計	男		5,820	5,621	5,839	5,502	
		女		9,959	10,047	10,332	10,009	
		計		15,779	15,668	16,171	15,511	

註1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

2) 1883年以後は1月1日現在で、それ以前は12月31日現在と推定できる。1882年と1883年が同一となっているのはこのことによると思われる。

3) 1881, 82年の現住人口は、本籍人口、出寄届人口、入寄届人口にもとづき算出したもの。

### 3 明治当初における産業構成・職業構成

無職となった士族の就業こそこの時期の最重要課題の一つであって、この点の検討は後ほど行なうが、この士族でない住民、かつての町方の、幕末、明治初期の職業構成についても明らかではなく、士族のそれとともに本稿での中心的な検討点である。

まずここで、明治に先立つ時期の産業の状況のみよう。はじめに、職業構成のみよう。この点に関しては、これまでに谷口澄夫氏の1652（承応1）年と1707（宝永4）年についての以下のような検討がある。1652（承応1）年については、町方居住者（男）1万4200人のうち、本来的な町人と思われるものは1万0353人、全体の約73%で、このほか各種奉公人1922人、約13.5%、「うき人」（浮人）1880人、約13.3%、そして「馬おい」45人などとなる。1880人の「うき人」は853の零細行商人であるざるふり、212の賃持、130人のたばこ刻、685の「諸職人弟子佗人又ハわひ人子共」であり、1922人の奉公人には、691人の農村からの流入者であることから、「以上によって、承応元年当時既に町方居住者も、単なる町人以外にもろもろの職種・階層のものが相当数混在していたことがわかる」とされている。1707（宝永4）年については、「商売ニ而渡世仕候老若子共迄」8159（男4349、女3810）人、「諸職人ニ而渡世仕候老若子共迄」5360（男2779、女2581）人、「日用ざるふりニ而渡世仕候老若子共迄」7971（男3996、女3975）人などから、合計3万0639（男1万5727、女1万4908）人という町方居住者のうち、商人は約27%、これにざるふり（零細行商人）約26%を加えると広義の商人は約53%、職人が約17%、これにそのほかの商人、職人に類するものを加えるといわゆる商人が70%以上になり、ついで奉公人・下人が約16%、残り約14%が雑多なもので占められる、そして、下人のうちの約90%が農村出身であることが注目される、としている<sup>(3)</sup>。なお、この1707（宝永4）年の城下に居住した藩家臣団、その家内、召仕の総数は2万1132（男1万2226、女8906）人で、それに鴨方

支藩および生坂分家などの1496（男984，女512）人を加え，総計2万2628（男1万3210，女9418）人となっている<sup>(4)</sup>。

町方の約17%に及ぶ職人であるが，以上のような領主とその家臣団を主要な需要対象とした，武具類そのほかの物品の生産が行われるほか，町方の生活用にむけられる日用品の生産が行なわれる。後年の1737（元文2）年撰の「備陽国志」の「岡山府」の主要な物産として，麴（児島町にて是を製す），藺笠（森下町・古京町にて造る），糖（東中島町にて製す），桶（桶屋町に多し），工匠（大工町に多し），皮鞋（小原町にて造る），紡車・攪車（共に上之町にて是を造る），鍛冶（小橋町に多し，鎌・鋏・釘の類），鉄煙管（常盤町にて造る），瓦（下市町にて是を造る），熊野染（府内所々にて是を染出す），などあり，「備陽往来」にも数々の物産と産地名をあげているが，上記と重複しないものとしては，石関の鏝，磨屋町の傘張，門田の刺足袋，御堂の桃，西川織の兜羅綿，小原町の雪駄，である<sup>(5)</sup>。

以上が藩政期の住民構成と物産であった。明治以降の岡山市域での産業はこのような状況を歴史的な前提として展開するのである。

岡山市の初期の産業状況を包括的に示すものに『岡山市史 第六』（1938年岡山市役所）の4651～4653ページに掲載されている「明治七年岡山市中物産」がある。この「明治七年岡山市中物産」は明らかに「明治七年府県物産表」調査の岡山区の分である。この1874（明治7）年の「物産表」はわが国近代最初の網羅的な生産物統計であり，近代の始点＝開港以降の幕末における産業状況を知るうえでの貴重な資料である。『岡山市史 第六』は，その出典を「備前地誌」としているが，この「備前地誌」は，当時岡山県立図書館が所蔵していた写本であって，第二次大戦時の被災により焼失したものと推定され，現存しない<sup>(6)</sup>。岡長平氏の著作にも「備前地誌」からの引用があるが12品

(3) 谷口澄夫『岡山藩政史の研究』1964年 塙書房 467～470ページ。

(4) 『岡山市史 産業経済編』1966年 岡山市役所 44～46ページ。

(5) (4)と同一書 51～52ページ。

目のみについてであり、<sup>(7)</sup>この『岡山市史 第六』のものがそのすべてのものとして重要である。

生産額からみた主要物品をあげると、清酒、足袋、鬘付、刻煙草、醬油、蠟燭、種油、木綿、下駄、酢、染地木綿、藺編笠、などであるが、第2表は、それを部門別構成表としたものである。農産物13.0%、林産物0.04%、工産物86.9%となるが、これまでの集計方法にしたがって農産物に入れた木綿、刻煙草はいずれも加工品であり、また林産物に入れた附木も加工品とした方がよいとすれば、物産はすべて工産物とみなし得る。農業をほぼ全くというほどもない岡山城下としては当然のことである。部門別にみた最大の飲食物は、清酒、醬油、味噌、銘酒などの醸造物である。それにつぐ農産加工品は、油類、蠟燭、木綿糸、綿織物に中分類されるものである。油類は、鬘付、種油など2万6199円余、織物は晒木綿・染地木綿3832円余・8780反である。そのウェイトの大きい雑貨手芸品は、足袋、編笠のほか、元結、銀簪などの化粧具、石筆などの文房具である。林産加工品は、戸障子676円余、戸棚、箱類、箆笥などの指物類1272円余、各種桶類1万0025個・1333円余、下駄4901円余・11万9937足である。そして、器具・船舶・車輜がある。多くは旧城下町方の手工業をひくものであろう。

ここで特徴的なことの一つは、全国では1.3%という器具・船舶・車輜とした部門の0.57%という小ささである。膨大な農村部をかかえる備前全体の0.31%より大きいとはいえ、城下の手工業を有した城下としては極めて小さいものであろう。それは人力車(16輛・212円)、荷車(20輛・80円)の荷車類292円と鍬(1250挺・371円余)、鎌(1420挺・109円余)、鋤(300挺・99円余)、鋸(410挺・86円)などの農具665円余である。このように農具の生産もある

(6) 岡長平『岡山経済文化史』には「備前地誌」について、「明治七年書写」(31ページ)、「不聞の写本」(52ページ)、「岡山県立図書館所蔵. 写本, 著者不明なり. 誰かの手控へらしいが精確なり。」(61ページ)、とある。

(7) (6)と同一書 101ページ。

第2表 岡山区物産構成——1874（明治7）年——

	岡 山 区		岡 山 県	全 国	岡 山 区 主 要 物 産
	円 銭 厘	%	%	%	
農 産 物	22,057.41.0	13.0	69.0	63.2	酒袋 47,257.81.0 (6,325石) 煙 21,472.04.0 (231,865足) 付草 18,561.00.0 (28,557貫720匁) 油 15,765.41.0 (10,099斤) 蠟 9,378.37.0 (1,845石5斗) 燭 9,000.08.0 (7,108貫160匁) 油 6,824.22.8 (461石3斗) 綿 6,292.00.0 (24,200匁) 木 4,901.62.5 (119,937足) 下 3,902.50.0 (1,115石) 酢 3,532.74.0 (7,780反) 染地 4,485.00.0 (385,000枚) 編笠 4,485.00.0 (385,000枚) 石筆 2,553.70.0 (899,000本) 木綿糸 1,920.00.8 (906貫800匁) 元結 1,847.70.0 (1,239,800束) 銀管 1,506.53.0 (4,370本) 味噌 1,419.56.5 (10,271匁) 諸酒 1,370.44.0 (73石1斗) 紅 1,101.12.0 (8,195匁) 附戸 966.85.0 (744) 油 814.00.0 (25石5斗6升) 棚 763.00.0 (143)
林 産 物	72.00.0	0.04	2.5	3.3	
水 産 物	—	—	4.0	1.9	
肥料・飼料	—	—	0.61	1.1	
工 産 物	146,742.84.1	86.9	24.5	30.5	
飲 食 物	63,579.31.0	37.6	13.5	12.0	
農産加工品	40,952.05.6	24.3	7.9	11.9	
林産加工品	12,669.31.5	7.5	0.41	1.3	
雑貨手芸品	28,534.55.0	16.9	1.4	1.9	
陶 磁 器	—	—	0.32	0.8	
器具・船舶車輛	957.61.0	0.57	0.31	1.3	
その他加工品	50.00.0	0.03	0.01	0.2	
金 属 鉱 石	—	—	0.13	1.1	
総 計	168,872.25.1	100.0	100.0	100.0	

註1) 「明治七年岡山市中物産」(『岡山市史 第六』1938年, 岡山市役所, 4651~4653ページ) より作成。ただし岡山県は「明治七年府県物産表」(『明治前期産業発達史資料 第1集』1959年, 明治文献資料刊行会) より作成。

2) 全国は, 古島敏雄『産業史Ⅲ』1966年 山川出版社 74ページによる。

が、その数量も小さい。周辺農村への農器具供給地としての機能は大きくないようである。ここにはかつての武具生産はなくこのことがこの部門のウェイトを低からしめているであろうが、それにしてもそれに替る器具生産の動きを読みとることはできない。

#### 4 明治10年代の産業状況

1881（明治14）年の「西南諸港報告書」（開拓使編）は、岡山港について、「輸出物産ハ多ク本国及美作備中ヨリ輸送シ来リ大坂神戸四国方面へ転輸シ、輸入物ハ大坂神戸及ヒ北海道ヨリシ管下一般ニ販売ス。」、物産問屋86戸、仲買63戸、定繫船300石積以下259隻、としている。<sup>(8)</sup>このような、物産集散地であるが、第3表は1880（明治13）年から86年までの岡山河岸物産移出入状況を示すものである。移出入総額は1880年であったものがジグザグをたどりながら85年には71万円台となり、86年はやや回復するが81万円余にとど

第3表 岡山河岸物産県外移出入額の推移——1880（明治13）～1886（明治19）年——

	1880年 (明治13)	1881年 (明治14)	1882年 (明治15)	1883年 (明治16)	1884年 (明治17)	1885年 (明治18)	1886年 (明治19)	
移出入総額	円 1,232,836	円 1,077,502	円 1,142,169	円 1,043,365	円 1,045,113	円 712,383	円 810,011	
移出額	282,059	435,665	583,477	562,498	574,273	474,190	411,835	
移入額	950,777	641,838	558,692	480,867	470,840	238,193	398,176	
指 数	移出入額	100	87.4	92.6	84.6	84.8	57.8	65.7
	移出額	100	154.0	206.3	198.9	203.0	167.6	145.6
	移入額	100	67.5	58.8	50.6	49.5	25.1	41.9

註1) 明治16年、明治19年の『岡山県統計書』より作成。

(8) 『明治前期産業発達史資料 第3集』1959年 明治文献資料刊行会 831ページ。



まる。1880年を100として81年87.4, 82年92.6, 83年84.6, 84年84.8, 85年57.8,そして86年65.7である。この間移出額は増大していつているのであり、増大の後減少をたどった86年でさえも1880年を100として145.6という大きさであって、この総額における縮小は、当初全体の77.1%を占めていた移入における顕著な減少によるのである。移入額は1880(明治13)年を100として以後、67.5, 58.8, 50.6, 49.5, 25.1, 41.9である。明治10年代(1887～)後半期における移出入額の減少は、移入額の減少によっているのである。

第4表は、1880(明治13)年と86年の移出入の部門別構成を示すものである。部門別は、後年の『岡山県統計書』におけるものにあわせてのものである。1880年についてまず検討しよう。移出入全体では、織物及同製品が42.4%を占め、最大の部門となっている。ついで、其他雑品28.3%、普通農産物が8.1%などとなる。移出では、普通農産物が最大で32.8%を占め、ついで、其他雑品26.7%、織物及同製品15.8%、飲食物14%などとなる。個別商品では、米が最大で32%を占め、ついで各種織物13.9%、足袋12.7%などである。この移入の3倍の大きさである移入は、各種織物及同製品が51%を占め、ついで其他雑品が28.8%、糸類及其原料が7.7%などとなる。個別商品では、各種織物が26.7%、呉服太物が21.5%で、この両者で半分近くを占める。このほかでは、木綿糸6.9%、洋小間物6.4%などがそれらにつぐ。これが1886(明治19)年にはつぎのようになる。部門別には、普通農産物が輸出が増大して移出中の69.7%を占め、このことによって移出入全体の37.3%となり、最大となる。織物及同製品は移入の45.7%を占める輸入中の最大の部門であるが、移出入全体では普通農産物につぐものとなっている。このほか、糸類及其原料が移出、移入ともに大きくなり、其他雑品の移出が小さくなり、飲食物が移入は小さく、移出においては大きくなっている。個別商品では、米の移出に占めるウェイトが69.4%という大きさとなり、織物、足袋のそれが小さくなり、木綿糸のそれが大きくなっている。また、呉服・太物の移入におけるウェイトは34.5%といっそう大きくなっているが、織物のそ

第4表 岡山河岸物産県外移出入部門別，主要品目別構成——1880（明治13）～1886（明治19）年——

	1880（明治13）年			1886（明治19）年			構 成 比						
	移 出	移 入	移 出 入	移 出	移 入	移 出 入	1880（明治13）年			1886（明治19）年			
							移 出	移 入	移 出 入	移 出	移 入	移 出 入	
	円	円	円	円	円	円	%	%	%	%	%	%	
普通農産物	99,311	—	99,311	283,242	—	283,242	32.8	—	8.1	69.7	—	37.3	
水産物	—	28,414	28,414	—	6,369	6,369	—	3.1	2.3	—	1.8	0.84	
飲 食 物	42,332	13,082	55,414	13,111	27,866	40,977	14.0	1.4	4.5	3.2	7.9	5.4	
織物及同製品	47,780	474,822	522,602	13,305	161,593	174,898	15.8	51.0	42.4	3.3	45.7	23.0	
糸類及其原料	—	71,657	71,657	50,885	37,473	88,358	—	7.7	5.8	12.5	10.6	11.6	
金屬及同製品	21,916	36,469	58,385	18,587	6,255	24,842	7.2	3.9	4.7	4.6	1.8	3.3	
編物及其原料	10,785	17,332	28,117	9,190	—	9,190	3.6	1.9	2.3	2.3	—	1.2	
油類及燃料	—	20,891	20,891	1,112	13,526	14,638	—	2.2	1.7	0.27	3.9	1.9	
其 他 雑 品	81,021	267,468	348,489	16,996	100,850	117,856	26.7	28.8	28.3	4.2	28.5	15.5	
合 計	303,145	930,135	1,233,280	406,428	353,942	760,370	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
主 要 個 別 商 品	米	96,875	—	96,875	281,880	—	281,880	32.0	—	7.9	69.4	—	37.1
	吳 服	—	200,144	200,144	—	70,971	70,971	—	21.5	16.2	—	20.1	9.3
	太 反	—	—	—	—	50,885	50,885	—	—	—	—	14.4	6.7
	洋 織	42,271	248,475	290,746	5,809	39,737	39,737	13.9	26.7	23.6	1.4	—	0.76
	織 木	—	64,000	64,000	50,885	—	50,885	—	6.9	5.2	12.5	—	6.7
	綿 糸	—	—	—	—	30,058	30,058	—	—	—	—	8.5	4.0
	足 綿	38,413	—	38,412	8,619	—	8,619	12.7	—	3.1	2.1	—	1.1
	洋 小	—	59,352	59,352	—	23,678	23,678	—	6.4	4.8	—	6.7	3.1
	陶 器	3,627	42,196	45,823	—	3,567	3,567	1.2	4.5	3.7	—	1.0	0.47
	漆 器	—	37,838	37,838	—	2,217	2,217	—	4.1	3.1	—	0.63	0.29
	石 炭	—	20,891	20,891	—	13,526	13,526	—	2.2	1.7	—	3.8	1.8
	菜 種	1,347	10,019	11,366	—	20,393	20,393	0.44	1.1	0.92	—	5.8	2.7
生 蠶	—	24,802	24,802	—	2,930	2,930	—	2.7	2.0	—	0.83	0.39	

註1) 明治16年，明治19年の『岡山県統計書』より作成。

2) 部門別分類は，後年の『岡山県統計書』における分類によった。

れとしては洋反物となり、繰綿が移入の8.5%となっている。この間の増減欄をみると、移出では大きく増加しているのは、米と木綿であるが、移入には繰綿の3万円余があらわれているほかは増加は少なく、織物、呉服・太物はじめ多くの商品において減少している。

いずれにしても移出では米が最大で、それに紡績糸が加わり、移入では繰綿が加わっている。繰綿の移入、綿糸の移出の増大は、紡績業の成立展開をこれまた反映している。他方、移入では呉服・太物、織物が最大であるが、これを扱う商人＝問屋の力の大きいことが想定できるのである。

なお移入における著しい減少があったが、これはこの不況期における消費力の減少を反映したものといえよう。

このような物産の集散地である岡山区の、それらを扱う商人の存在状況を検討しよう。『岡山区統計書』は、1884（明治17）～86年の商業者の統計をあげる。それは個人業者を、卸売商、仲買商、小売商、雑商に分けたものである。この資料については、『岡山市史 産業経済篇』、最近の『岡山区史 近代1』において検討されている。前者においては、この経営類型別商業者が全県のそれぞれに占める割合を算出し、それにもとづいて岡山市の特徴を、岡山市は卸売商が相対的に多いことにおいて、ほかの地方都市は農村とは異なる県経済の中心都市としての性格をもっていたが、後年に比してその性格は遥かに希薄であること、当時の岡山の商店街の景観はその大部分が小売商と雑商によって塗りつぶされていたこと、しかし、この小売商、雑商も当時の交通事情によって、郡部の購買力を岡山市に吸収することは困難で、郡部の小売商、雑商の発展を傍観していなければならなかったこと、を指摘し、そして、卸売商、仲買商、小売商、雑商のそれぞれの主要なものをあげて、取り扱われた商品は維新以前のそれとほとんど変化がなかった、としている。<sup>(9)</sup> 後者においては、1890（明治23）年の問屋・卸売・仲買の主要なもの、1884年

(9) 前掲『岡山市史 産業経済篇』518～519ページ。

の小売商、雑商の主要なものをあげ、これらにもとづき、これらの取扱商品は資本主義の発達によって、石油、機械生産の砂糖、洋反物・洋小間物などが商品になりつつあるが、大部分の商品は依然として旧来の生産方法によるものであった、としている。<sup>(10)</sup>

このように検討されてきたこの資料によって、さらに検討を行ないたい。1884（明治17）年について主要なものについて郡部との対比のうちにみていこう。岡山区の主要な卸売商は、雑菓子38、薪炭23、呉服洋反物18、足袋15、醤油14、紙13、絞油12、酒類受11、砂糖10などであるが、岡山区を除く備前のそれらは、7、28、5、16、46、1、25、7、2となっている。雑菓子、呉服洋反物、紙、砂糖などは岡山区が多く、薪炭、足袋、醤油、などでは郡部が大きく凌駕している。他地方からの移入品については岡山区の卸売商が大きく、産出物については在方の問屋が多い。石炭油商は岡山区は9であるが、郡部は17あり、これも在方において取り扱われているものである。岡山区の仲買商の主なものは、穀物36、港商19、太物・木綿・綿12、畳表8などであるが、備前の郡部は、それぞれ444、81、46、17であって、いずれも郡部の方が圧倒的に多い。郡部には、以上のほかに魚68、薪炭・材木57、塩28、青物20、糠、皮骨各11と多数の仲買のあるものがあるが、これらは岡山区は4、0、2、4、3、0というようにゼロ、あるいは僅少である。総じて在方には仲買が多く存在している。小売について、岡山区の主要なものをあげると、諸品取次出売514、菓子饅頭雑菓子349、酒類受215、薪炭134、履物傘54、荒物52、八百屋物52、呉服洋反物37、魚33、石炭油絞油32、菓種30、鳥獣肉29、金物鋳物28、砂糖26、などとなっている。これらの郡部分をみると、それぞれ、1564、773、1284、183、65、170、80、83、52、171、28、22、21、119となっていて、多くのものの郡部での数の大きさは仲買の場合以上である。郡部には、以上のほかに醤油251、肥物219、足袋152、酢醤油受

(10)『岡山県史 近代1』1985年 岡山県 256～257ページ。

108, 紙98, 麴84, 篠綿綿袋81などなど多数のものがあるが、岡山区は篠綿綿袋の24を最大としていずれもそれ以下である。小売の場合は仲買にもまして郡部のウェイトが大きい。雑商は、岡山区についての上位をあげると、旅籠屋157, 古着153, 古道具133, 煮売屋121, 質屋70, 湯屋70, 料理屋70, 豆腐37, 履物木地表緒25, 瓦焼并土焼23, 貸蒲団屋21, 挽粉21, 印判20などであって、その多くは物品販売業ではない。これらの郡部のそれをあげると、665, 247, 90, 401, 199, 157, 35, 415, 46, 151, 7, 108, 5であって、郡部に多いものもあるが、岡山区にこそ多いものがある。他方、郡部に多いのは、温飩蕎麦屋204, 蒟蒻49, 附木製造47, 線香製造42, 湯波36, 藍製造33, 鮓屋21などで、その種類は多くない。この雑商には都市雑業的なものが多いのであり、仲買, 小売よりは、都市集中的性格が大きい。

第5表はこの商業営業の推移を検討するものである。まず総じて、卸売商は岡山区のウェイトが半ば程度であるのに対して、仲買商は11~14%, 小売商は10数~20数%と小さく、仲買商, 小売商は郡部のウェイトが圧倒的である。そして、雑商であるが、これも郡部のウェイトが大きいとはいえ、それは仲買商, 小売商ほどではなく、むしろ卸売商とともに都市的なものが少なくなく、都市雑業的なものを多く含む。つぎに、この1884(明治17)年の岡山区の商業者は3487, 郡部は1万0304であり、全体中のそれぞれ25.3%, 74.7%であった。それが1885年には岡山区では減少し、郡部では増加した後、86年には岡山区では増加し、郡部では減少して、結局は、この間に前者は増加、後者は減少となっている。各類型別にみると、岡山区の雑商を除いて、他はいずれも減少しているのである。そして、岡山区の小売商, 郡部の仲買商, 小売商において1884年から85年にかけて一度増加し、そして翌86年にかけて減少して、86年には84年以下となっているのである。結局は、岡山区の雑商はこの間に増加しているという際立った特徴となっているといえるのである。そもそも都市的性格をもつものが多い雑商の、他がいずれも減少しているなかでのこの岡山区での増加は、このデフレ期に都市雑業的生業的

第5表 岡山区類型別事業者—1884(明治17)～1886(明治19)年—

		卸売商	仲買商	小売商	雑商	合計
岡山区	1884年 (明治17)	226	111	2,032	1,118	3,487
	1885年 (明治18)	190	112	1,507	762	2,571
	1886年 (明治19)	127	101	1,750	1,606	3,584
岡山区を除く 旧備前国分	1884年 (明治17)	192	829	6,159	3,124	10,304
	1885年 (明治18)	177	857	7,269	3,124	11,427
	1886年 (明治19)	113	613	4,931	1,668	7,325
旧備前国分 合計	1884年 (明治17)	418	940	8,191	4,242	13,791
	1885年 (明治18)	307	969	8,776	3,886	13,998
	1886年 (明治19)	240	714	6,681	3,274	10,909
旧備前国分 における岡山区 のウェイト	1884年 (明治17)	54.1%	11.8%	24.8%	26.4%	25.3%
	1885年 (明治18)	61.9	11.6	17.2	19.6	18.4
	1886年 (明治19)	52.9	14.1	26.2	49.1	32.9

註1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

営業に依存していく者の多いことを示しているといえるであろう。

以上の岡山市街とそのほかの備前との比較から、卸売は岡山区への集中が大きく、仲売、小売は在方が多く、岡山区内のウェイトは相対的に小さい。また、当初よりその数が多い都市独特の雑商はいっそう増加しており、これが松方デフレ期間に都市住民の生業となっているのであり、これが都市下層の生活を支えるものの一つとなっているのである。

つぎに、この時期の製造業をみよう。1884(明治17)年の『岡山県統計書』によれば、同年の製造品目別の製造所・人数、製造高は、酒類53, 7100

石3斗6合、足袋32、47万4836足、刻煙草25、4万6782貫290匁、編笠3、13万8120枚、洋燈心2、1万2650コロス、団扇2、6300本、靴1、1900足、綿糸1、2万1317貫700匁、筆1、1万7270本、軸木1、15万3510把、陶器1、2340個となっている。このほかに度量衡の生産がある。これらのうち、軸木は有恒社（片瀬町）、紡績は紡績会社（花畑）での生産である。紡績は近代工場生産であるが、ほかは手工業である。

## 5 明治10年代の困窮状況

禄制廃止によって、元家臣団であった士族は、公債証書をうけたものの、職業・俸給を失い、多くは困窮の途をたどったことはいうまでもない。有元正雄氏は『興業意見』の統計数値および記述から金禄公債発行時から僅か7年後の1883（明治16）年末には所有者で21.8%、金額で24.9%となってしまうことを明らかにしているが、その5年前にすでに37.8%、56.2%に減少してしまっている<sup>(11)</sup>のであり、松方デフレ期を待たずにすでに手離してしまっているのである。すでに、この年までにこのようになっているが、第6表は、この明治10年代の岡山区における公債証書の所有状況の推移を示すものである。1879（明治12）年を始点として、以後所有者数は年々大きく減少し、個人所有でみて、86年までに1189人、449円93銭という、減少率67%、51.7%という顕著な喪失が進行しているのである。1879年から80年にかけてすでに著しいが、82～83年間がもう一つの山となり、さらに85～86年間に再び山となるのである。このようにすでに進行していた喪失は、この松方デフレ期にいっそう進行したのである。なお、この間の1人あたり平均所有額をみると漸増しているが、これは小額所有者から喪失していつていることを示すといえるのであり、旧下級武士層がいっそう困窮していることをみるこ

(11) (10) と同一書 246～247ページ。

第6表 岡山区公債証券所有状況——1879（明治12）～（明治19）年

	1879年 (明治12)	1880年 (明治13)	1881年 (明治14)	1882年 (明治15)	1883年 (明治16)	1884年 (明治17)	1885年 (明治18)	1886年 (明治19)	1879～86 年間の増 減	
所有者数	人 1,777	1,329	1,157	993	827	737	706	599	-1,178	
内個人	人 1,777	1,324	1,143	979	816	715	683	585	-1,189	
額面金額	円 1,204,280	1,056,005	1,102,990	1,136,120	1,001,285	1,007,855	1,056,294	914,215	-290,065	
内個人	円 869,280	693,480	657,810	621,395	502,085	483,785	479,395	419,980	-449,300	
1人あたり 平均	円 銭 677.70	794.59	953.32	1,144.13	1,210.74	1,567.51	1,496.17	1,526.24	848.54	
内個人	円 銭 490. 銭	523.78	575.51	634.72	615.30	676.30	701.90	717.91	227.90	
増 減 率 (%)	所有者数		-25.2	-12.9	-14.2	-16.7	-10.9	-4.2	-15.2	-66.2
	内個人		-25.3	-13.5	-14.3	-16.4	-12.4	-4.5	-14.3	-67.0
	額面金額		-12.3	-0.54	3.0	-11.9	-0.67	4.9	-13.5	-24.1
	内個人		-20.2	-5.1	-5.5	-19.2	-3.6	10.9	-12.4	-51.7

註1) 明治16年までは明治16年の、そのほかは各年度の『岡山区統計書』により作成。

2) 増減率は1886年までは対前年比増減率、1879～1886年欄はこの間の増減率。

ができるであろう。

以上は公債所有者という旧武士層の困窮状況を示すものであるが、第7表の地所売買・質書入れ、建物の売買・質書入れの状況は、よりひろく住民全体の状況を示すといえよう。土地売買は年々6～9%台の売買率で、1883（明治16）～86年で32.5%が売買されている。質書入れも年々10～22%で、この間に合計77%の土地が質書入れされているのである。また、建物の売買、質書入れも同様に年々大きくみられる。1坪あたりの金額を算出すると、売買で83年の4円92銭から84年には3円39銭、85年には3円06銭と大きく縮小しているが、これは不況状況の深化を反映しているものといえよう。以上はいずれもこの時期の住民の困窮状況を示すものといえよう。

物価・賃金の動向を一瞥しておこう。この時期のものに岡長平氏作成の、



第7表 岡山区地所・建物売買、質書入状況

—1881(明治14)～1886(明治19)年—

		1881年 (明治14)	1882年 (明治15)	1883年 (明治16)	1884年 (明治17)	1885年 (明治18)	1886年 (明治19)	
地 所	地 価 額 (券 面)	円 406,813.273	円 405,664.643	円 406,747	円 402,175	円 401,714	円 403,998.66	
	土地面積	町反 209.0	町反 208.6	町反 208.8	町反 198.0	町反 195.8	町反 196.7	
	売	売買金額	円 32,791.49	円 35,665.73	円 43,475.18	円 45,693.70	円 38,310.02	円 30,503.47
		買 券面金額	27,154.89	31,308.86	34,004.19	37,281.07	34,123.28	25,562.15
	質 書 入	貸借金額	—	—	円 116,752	円 98,457	円 76,316	円 47,239
		“(年 末現在)	—	—	157,952	173,583	168,930	158,542
		券面金額	—	—	92,077	89,552	79,219	50,016
		“(年 末現在)	—	—	110,383	140,997	164,771	171,664
	比 率	売 買 (券面)	—	—	8.4 %	9.3 %	8.5 %	6.3 %
		質 書 入 (券面)	—	—	22.6	22.3	19.7	12.4
建 物	売 買	建 坪	坪 11,383	坪 1,649	坪 14,538	坪 20,589	坪 15,898	坪 12,028
		金 高	円 49,689	円 8,012	円 71,570	円 69,750	円 48,599	円 32,839
	質 書 入	建 坪	坪 89,422	坪 26,877	—	—	—	—
		金 高 (年末)	円 105,453	円 10,249	円 128,728	円 182,996	円 201,945	円 200,246
		年間貸借	—	—	116,462	123,219	73,366	49,107

註1) 明治16年までは明治16年の、そのほかは各年度の『岡山区統計書』より作成。

「自明治元年至同十年物価賃金年別平均表」と「自明治十年至同二十一年岡  
山諸物価賃金年別平均表」<sup>(12)</sup>がある。1868(明治元)年から1888年までのもの

(12) 前掲 岡長平『岡山経済文化史』529～532ページ。

で物価・賃金の推移を知る上で有用なものであるが、出所を「物価諸統計」「岡山勸業年報」「商工月報」「勸業統計」としていて、その連続性の吟味を要するであろう。ここでは『岡山県統計書』によって作成した第8表をみよう。1881（明治14）年を起点としてその後に物価、賃銭ともに下落していき、あるいは、84年を底として以後上向き、またあるいは、86年にいたるま

第8表 岡山区の賃銭・物価——1881（明治14）～1886（明治19）年——

		1881年 (明治13)	1882年 (明治15)	1883年 (明治16)	1884年 (明治17)	1885年 (明治18)	1886年 (明治19)
賃 銭	大工(日給)	円銭厘 40	円銭厘 35	円銭厘 30	円銭厘 15	円銭厘 25	円銭厘 23
	左官(日給)	38	35	28	15	23	22
	壘刺(日給)	40	35	36	28	26	25
	鍛冶(日給)	42	35	45	30	34	33
	僕(年給)	(日) 27	(月)4.00	(月)2.00	13.66.7	13.00.0	12.00.0
	婢(年給)	(日) 16	(月)1.50	(月)1.20	8.50.0	8.50.0	7.20.0
物 品 の 相 場	岡山区産編笠(10枚)	20	18	14	4.8	7.7	10.4
	岡山区産蠟燭(1貫)	1.66.7	1.40.9	1.07.9	1.31.3	1.18.8	1.14.0
	岡山産綿糸(1貫)	4.03.1	3.84.4	2.62.5	2.21.9	2.12.8	1.90.5
	岡山産足袋(10足)	1.42.5	1.35.0	1.10.0	90.0	82.0	66.0
	赤坂郡磐梨郡 産黒砂糖(1斤)	12.9	12.3	7.8	7.9	7.9	6.7
日 用 品 の 平 均 種 相 場	精米(1石)	9.18.3	8.57.2	7.11.7	5.50.1	6.30.8	5.43.2
	麦(1石)	5.02.1	4.19.6	2.83.6	3.52.1	4.32.6	3.19.6
	酒(1石)	15.95.7	14.64.0	11.79.8	10.79.8	12.60.0	13.78.3
	醬油(1石)	10.87.6	7.51.0	8.58.4	6.86.2	5.85.0	5.65.0
	塩(1石)	1.20.1	1.20.0	1.00.0	1.50.0	1.00.0	95.0
	種油(1石)	33.24.0	39.28.8	21.89.2	15.79.2	18.25.0	17.97.5
	薪(1貫)	1.4	1.0	0.9	0.7	0.6	0.5
炭(1貫)	8.7	7.0	6.0	3.5	3.2	3.3	

註1) 各年度の、ただし明治13～15年は明治16年度の『岡山県統計書』より作成。

2) 僕婢の(日)は日給、(月)は月給。

で下落しつづけるなど様々ではあるが、いずれにしても81年からの下落は著しい。1881年を100とする86年の指数を算出すると、日用品の精米は59.9、麦70.1、岡山区産編笠24.0、同綿糸55.0、職人賃銭大工37.5、左同官39.4、などであり、日用品の相場、生産物の相場、賃銭を比較すると、賃銭の下落が最も大きく、ついで当地生産品、そして、日用品であるとみなし得る。賃金収入が最も下落し、販売物がそれにつぎ、そして日用消費品は相対的に高いということ、生活逼迫がいっそう著しいことを示しているといえるであろう。

1885（明治18）年8月、この岡山市を訪れた森田文蔵は、「岡山の山陽有名の都会の地たるは、今更らに記すへきまでもなく世に著はれたる大市なるか、一般大不景気の数には洩れん術もなく、概するに皆な商売の閑に苦むと云ふの外なし。」と記し、最近の甲乙二人の著名な商人の窮迫状況を紹介し、また、「又たズット下りて日々の行商を事とる者及び日傭稼の者の類の困病は殆と隠掩すへき様なく、諸税諸掛の徴収期毎に此種族多き部の戸長用係は皆な首を疾まさゝるはなし。」として、徴税の期の徴税者の必死の様子を描いている。そして、岡山区第10部戸長役場（管轄10カ町）で80余戸が公売処分に付される模様、と記している。そして、大家はその経済が巨大であるだけに一度運転に窮したときは大きな損失を蒙ることがあるが、「其日稼きの者は稼き道の縮塞せるかため目前直接の苦を受く。」と、岡山市の住民の生活状況を報じている。<sup>(13)</sup>

## 6 都市下層民としての再編

この時期の問題としては、士族授産・殖産興業政策について多く論及されるが、ここでは圧倒的多数の無産者となった者の都市住民としての再編過程

(13) 森田文蔵の『郵便報知新聞』第3736号（明治18年8月5日）記事（『明治文化全集 第15巻 社会篇（統）』1957年 日本評論社 334～335ページ）。

をこそ課題とする。

多数の無産の人々の衣食を検討しよう。物産集散地であり、また人口3万を越す消費都市であり、当然のことながら商業が中心的な職業となる。また、物資の移送、人々の往来を反映した交通・運輸の業にたずさわりの接客関係の仕事もまた少なくなかろう。さらに、旧城下町での手工業・諸職人仕事が多量にあるであろう。

先の商業者のなかの小売、雑商によってこの岡山に広汎に存在する都市諸営業・生業をみたが、ここで、もう一つの資料を検討しよう。『岡山県統計書』は、警察篇に「取締ニ関スル諸営業」をあげている。第9表は、1886（明治19）年のそれを示す。岡山区の総数6096のこれらは、後の「国勢調査」の分類にしたがって整理すると、商業中の物品販売業、同じく商業中の旅宿飲食物浴場業等、交通業中の運輸業、それに公務自由業中の其他ノ自由業、そして農業、工業に属するものとなる。物品販売業に属するものは2683でこれは戸数である。旅宿飲食物浴場業等に属するものは娼妓を別にして1081で、これも戸数であり、運輸業に属するものは2085で、これは人数である。このほかは、工業に属する4（戸）、農業に属する17（人）、そして、其他ノ自由業に属する諸遊芸人と芸妓96（人）、旅宿飲食物浴場業等に属する娼妓130（人）となる。先にみた商業者の雑商が若干の製造業を含むものの物品販売業と旅宿飲食物浴場業であったのに対して、ここでは運輸業に従事する労役者と遊芸人、芸妓、娼妓を含んでいる。このように、都市住民の営業・生業、ことに下層のそれをいっそうよく把握したものとなっているのである。

第10表はこの取締営業中の1886（明治19）年の戸数の多いものを取りあげ、それらについて84年との比較、商業中の雑商との対比を検討するためのものである。1886年であるが、最大が古着の667、ついで古道具502、飲食物467、古銅鉄420などなどとなる。これを84年と比較すると、そのいずれにおいても増加がみられ、その多くは顕著な増加である。人力車夫の増加、陸運役夫、荷車引、渡守も記載されている。1884年から86年にかけてのこの変化

第9表 岡山区警察取締に関する営業——1886（明治19）年——

分類	営業名	岡山市街	岡山市街 を除く 備前	合計	分類	営業名	岡山市街	岡山市街 を除く 備前	合計	
物品 販売 業	販肉	140	215	355	旅宿・飲食 浴場業等	寄席	2	—	2	
	刀剣商	47	20	67		観場	2	—	2	
	潰金銀	328	410	738		諸見物	1	5	6	
	銃砲彈丸免許商	3	2	5		諸興行場	—	21	21	
	古本	280	50	330		湯屋	68	78	146	
	小間物商	—	18	18		温泉・薬湯	—	1	1	
	袋物商	—	8	8		小計	1,081	1,222	2,303	
	古道具	502	450	952		畜産業	牛乳搾取	9	—	9
	甲商	—	15	15			家畜解剖場	7	28	35
	時計商	6	2	8			屠牛	1	10	11
	古書画	263	41	304			小計	17	38	55
	印刷商	27	15	42		運輸業	人力車	1,508	1,321	2,829
	古着	667	1,268	1,935			人馬引継	—	9	9
古銅鉄	420	432	852	馬車	1		—	1		
小計	2,683	2,946	5,269	荷車	186		2,152	2,338		
工業	煙管屋	—	12	12	陸運請負		—	3	3	
	煙火製造	1	—	1	渡守		95	282	377	
	印刷商	3	—	3	陸運役夫		298	613	908	
	飾屋	—	3	3	駄牛馬		—	1,212	1,212	
	小計	4	15	19	舟乗業		—	120	120	
旅宿・飲食 浴場業等	質屋	70	100	170	小廻船		—	1	1	
	旅人宿	278	452	730	小計	2,885	5,710	7,775		
	雇人受宿	23	20	43	その他	諸遊芸人	41	12	53	
	飲食店	467	462	929		芸妓	55	4	59	
	料理屋	120	56	176		娼妓	130	98	228	
	貸座席	48	27	75	合計		6,096	10,058	16,144	
	芝居茶屋	2	—	2						

註1) 『明治19年岡山県統計書』より作成。

2) 分類は第1回（1920年）の「国勢調査」の職業分類にしたがった。

第10表 岡山区の警察取締に関する営業の主要なものの商業中の雑商との  
対比——1884（明治17）・1886（明治19）年——

警察取締に関する営業			商業中の雑商		
	1884年 （明治17）	1886年 （明治19）	1884年 （明治17）	1886年 （明治19）	
古 着	489	667	153	283	古 着
古 道 具	238	502	133	230	古 道 具
飲 食 物	218	467	181	122	飲 食 物 <sup>※</sup>
古 銅 鉄	293	420	—	—	—
潰 金 銀	138	328	—	4	潰 金 銀
古 本	116	280	—	—	—
旅 人 宿	71	278	157	186	旅 籠
古 書 画	131	263	2	2	書 画、骨 董
販 肉	21	140	3	13	鳥 獸 肉
料 理 屋	39	120	70	125	料 理 屋
質 屋	62	70	70	58	質 屋
湯 屋	35	68	70	54	湯 屋

註1) 各年度の『岡山区統計書』より作成。

2) ※は、鰻屋、鮓屋、温饨蕎麦屋、汁粉、煮売屋の合計。

は、松方デフレの進行過程で、このような都市雑商的な小商業、力役的勞務者が増加していることを示しているものといえるであろう。つぎに、これを商業中の雑商と比較すると、その対比が可能なもののほとんどにおいて、取締営業の戸数が、雑商のそれよりはるかに大きい。このことは、たとえば古着商なら、商業中の古着商283戸としてはとらえられない384戸という多数のそれ以外の古着屋があることを示す。このような商業者中の雑商数をはるかに上回るこの取締営業は、商業者としては捕捉されない零細なものであったろう。このような、零細営業者の簇生がここには示されているものといえるのである。

この取締営業は合計3768戸と2328人とみなし得る。3768戸という数は、こ

の年の岡山区の総戸数8335戸の実に45.2%にあたる。これらのうちには、物品販売、旅宿料理屋浴場等には有力なものがあることはいうまでもないが、その数は多くはなく、多くは薄資零細であろう。また、2085人に及ぶ人力車夫、陸運役夫などの力役的労務者がおり、その数は2085、これを仮に世帯持とするならばこれが総戸数の25%となる。総戸数の70%が多くの零細雑商と力役的労務者を中心とする取締営業戸数が占めることになるのである。

かくして、かつて武家2万余、町方2万余、明治初期廃藩置県時には土族を3分の1とする3万の岡山城下町は、制度的改革と1881（明治14）年からの松方デフレを経て、このような零細営業、力役的労務者を圧倒的構成部分とする都市となったのである。

（1987. 9. 20）